



R5.11.25 撮影

【巻頭言】

「それでも、敢えて我が道を進む」

二本松市教育委員会教育長 丹野 学

福島県の教育界に身を置いて、あれこれ50年目の歳月が流れた。半世紀である。50年後の今、いまだに教育界の末席に身を置き仕事に取り組んでいる自分がある。そのような自分の存在が、不思議と言えば不思議である。すこぶる健康とは言えないまでも、なんとか職を全うするだけの身体でいられるのは、正に、家族や同僚の支えは勿論のこと、亡き両親のおかげであると痛感している。

何のために教職員を始め管理職が学校に存在するのか、更に、何故市町村教育委員会や県教育委員会が存在するのか。長年自問自答し続けてきた。価値観の多様化と言う名の下、「学校」や「教職員」に対する信頼やリスペクトが低下している現状を踏まえると、「学校」が子どもたちにとってかけがえのない教育機関であると言う認識が、社会全体で低下してきているのではないかと危機感を募らせている。

マスコミ報道によると、愛知県では、ラーニングとバケーションを融合させた「ラーケーション」という制度を定めた。この制度は、若干制度上の運用条件はあるが、年間最大3日間、保護者の申請で普通日に子どもたちを休ませ、学校外における親子の学びを保障する制度である。一見、「なるほど」と思いがちであるが、保護者の受け止め方をマスコミ報道で知る限り、疑問が膨らんでくる。保護者は概ねこの制度を歓迎している報道であった。「休日よりも、普通日の方が宿泊費等の経費削減につながる」「休日に仕事が入ることが多く、子どもたちとのふれ合いが減っているので歓迎する」などである。この言葉の背景にある、「学校」の存在に対する保護者の認識の低下を感じ取ってしまうのは、私一人だけだろうか。

『地域社会の中で、「学校」自体の存在が、揺らいできているのではないかと』と言うよりも、「学校」が果たしてきた役割を正しく評価されてきてはいないのではないかと不安がよぎる。

私は、子どもたちが「学力」を身につけていく「学校」の存在は絶対であると頑なに信じている。更に、「学力」を身につける日々の「授業」は、学校の命（宮前貢先生の言葉）であると確信している。「学力向上」が叫ばれて40年以上の歳月が流れたが、学校の授業の質的転換は図れないまま現在に至っていると云っても過言ではない。何故なのだろうと、素朴に思う。

学ぶのは子どもたちであって、学ばせることには限界がある。何故なら、「学ぶ」という行為は、意義と納得を伴って深まっていくものだからである。子どもたちが、「授業」のど真ん中で生き生きとした表情で学び合って「授業」の質を高めていかない限り、現状を打破することは不可能ではないか。穿った見方をすれば、前述での保護者の学校に対する信頼の低下の要因の一つが、学校の中に存在するのかもしれない。

管理職や地教委にとって、共通の最大の使命は、日々の授業を安定的に継続させることを基盤として、質の高い授業を目指し、子どもたちにとって学びがいのある学校を形成していくことにある。そのためには、校長としての揺るぎない学校教育に対する信念と、各学校において、子どもたちに対する職業人としての「教育愛」を教職員に敷衍していく地道で誠実で継続的な対応こそが求められているのだと思う。子どもを取り巻く環境が激変している今だからこそ、普遍的な学校教育の「観」をよりどころとしながら、「それでも、敢えて我が道を進む」強い意志を持った校長であってほしいと、心から願っている。

【小教研関係全般】

小教研の意義を再認識して、教員の授業力・実践力、そして安達地区の教育力向上へ

福島県小学校教育研究会安達地区会長 佐藤 憲博
(本宮市立和田小学校長)

1 小教研の意義を再認識する

今年度の小教研は、第Ⅷ期の基本主題「児童自らあらゆる他者と豊かにかかわり、未来社会の創り手として 必要な力をはぐくむ授業の充実」の第2年次としてスタートしました。14の研究部では、会員各自が研究したい教科領域で、部長さんのリーダーシップのもと、貴重な研修の場として、実践研究を進めています。この3年間、コロナの影響により、参集型の協議会が難しい状況でしたが、各学校においては、ICTを活用した教育実践を積み重ね、オンラインによる授業や研修会などが積極的に進められていました。その結果、児童が授業の中でタブレットを使いこなすことは、当たり前となりました。教職員の対応力の高さには驚くばかりです。リスクリングで力を蓄えた教職員が、今年度は参集することで、他校の先生方の実践に直接触れたり、課題解決の手立てを意見交換したりすることで、授業の力量や教育活動の質を高めるためのヒントや刺激を実感できたと思います。教科の指導を例に挙げれば、会員誰もが日々の授業を「より主体的・対話的で、深く学ばせたい」と考えをめぐらせていると思います。ベテランの会員と若い教員が共通の主題をもとに協議することで「教材観」「児童観」「指導観」を具体的に考え、実践し、質問し、学び合えます。その結果、子どもたちがよりよく学び、思いやりをもち、健康に育っていきます。さらに、その学びを校内に広げたり、教育課程に反映させたりすることが、各学校、安達地区の子どもたちの知性や感性、体力を伸ばすこととなります。こうした会員各自の主体的・対話的な取組こそ、これからも小教研の意義であると信じます。近年、研究物展において、個人研究の出品が少なくなっております。各校長先生におかれましては、各会員が一年一年実践を積み重ね、深めていくような実践記録を出品するイメージからチャレンジできるよう、励ましの言葉をお願いします。

2 社会科の研究協議会の成果を各学校で生かす

10月4日(水)、本宮市立五百川小学校において福島県小学校教育研究協議会社会科研究部会が行われました。この研究協議会は、福島県小学校教育研究会が主催し、県教育委員会、安達地区2市1村の教育委員会の共催で開催されています。

五百川小学校におかれましては、会場や授業の場所を工夫していただき、午前には体育館で各地区代表による実践発表、グループ協議が行われ、午後は広い教室で公開による授業研究会が行われました。3学年1組の橋本千恵子先生の授業は、手立てが明確で、児童一人一人が自分の考えをタブレットを使って分かりやすく伝えており、主体的・対話的で深い学びになる話合いが展開されました。事後研究会では、各地区代表及び安達地区部員による少人数での協議と全体共有を行いました。この成果が社会科部員から各学校に伝達され、安達地区内小学校の社会科教育の充実につながることを期待します。また、第Ⅷ期の3年目にあたる次年度の社会科の研究協議会は、二本松市で開催されることとなります。今年度同様、協働的な研究協議会となりますようご理解とご協力をよろしくをお願いします。



県研究協議会社会科研究部会の様子

【特集テーマ】

「自分やふるさとに誇りをもち努力 できる子どもの育成」を目指して ～歴史と伝統～

二本松市立塩沢小学校 菅野 芳弘

二本松市内の異動で、今度は塩沢小学校にてお世話になります。校長の引き継ぎで本校に初めて来たとき、まず印象に残ったのが、昇降口から見える安達太良山の景色の素晴らしさです。そして、前任者の佐久間仁先生から、実はこの塩沢小学校のある場所が、霞ヶ城の前身のお城があった場所とお聞きし、衝撃を受けました。それほど歴史と伝統のある学校に勤めることができ、大変光栄に思いました。



本校はコミュニティスクールの2年目で、委員の村上克恭先生は塩沢の歴史について指導されています。

陸奥田地ヶ岡

館（むつでんじがおかたて）という名称で、石碑や案内板があります。学校の南東にある道路に沿って土塁があり、校舎の裏側には大きな空堀と土塁が残ります。南北朝時代に奥州に下向した畠山高国が居館を構えたのがこの田地ヶ岡館と考えられており、三代畠山国詮まで続き、四代満泰のときに白旗城（現在の二本松城）へ移ったといわれます。

また、本校の特徴として、同窓会だけでなく、地域の児童育成会の存在も、ほかの地域にはない地元密着型学校である証拠だと思います。

今後は、この歴史や伝統だけでなく、塩沢の自然の良さなども生かして、ふるさと学習を中心に、地域に根ざした学習を重点的に進めていきたいと考えています。



【特集テーマ】

「ふるさとを愛し ともに未来を 切り開くたくましい子どもの育成」

二本松市立石井小学校 松浦 秀行

本校が目指す子供の姿の一つに、「地域を愛する子」があります。

今年度は、「地域に学ぶ郷土学習や栽培活動の推進」「学習の成果を地域に発信する場の工夫」

「地域に貢献する活動の推進」を重点目標に掲げ、野菜の栽培や地域の伝統芸能、福祉や防災をテーマに探究的な学習を展開しているところです。授業では、「石井っ子協力員」や学校運営協議会の皆様など、たくさんの地域の方々に御協力いただくことで、とても充実した学習ができています。

そして今、本校では、この地域の皆様の熱い思いに込めていくために、学習の成果を地域に発信することや、地域に貢献する活動に力を入れているところです。例えば、昨年度の5学年では、地区の民生委員さんと福祉について学んだ後、石井地域には一人暮らしのお年寄りが多いことを知り、交流の機会をもちたいと考えました。新型コロナウイルス感染症の影響もあり、直接の交流は叶いませんでしたが、民生委員の皆様に協力していただくことで、手紙や手づくりのプレゼントを届けることができました。また、今年度は、4学年の子供たちが、地域の防災について学習する中で、自分たちで石井地区の防災マップを作りたいと考え、地域の皆様にお配りすることを目標に頑張っているところです。

このような活動を通して、「自分が学ぶことで、地域が変わる」ことを経験し、地域への思いを高めていくことが、「ふるさとを愛し ともに未来を切り拓くたくましい子どもの育成」につながるものと考えています。



【趣味・随想】

自慢の教え子

大玉村立大山小学校

齋藤 和久

今年のゴールデンウィークに、かつての教え子たちが福島県に遊びに来てくれました。13年前に私がアメリカ・シカゴ日本人学校へ派遣された時に担任した生徒たちです。中学2年から卒業までの2年間を担任し、海外生活の楽しさと苦しさを一緒に経験した「戦友」のような存在です。

2011年3月11日、日本で大きな地震が発生し、大きな津波が東北地方を襲ったというニュースがアメリカでも速報で伝えられました。私は家族や友人らにすぐに電話しましたが、まったくつながらず不安な気持ちでいっぱいでした。数日後、交流していた現地の中学校から日本を激励するバナーが贈られ、私が所属していた中学部でも「何か行動を起こさなければならない」と毎日話し合いを重ねました。「果たして自分たちがやろうとしていることに意味はあるのか？」と疑問をもちながらも、地元で開催されたイベントに出演し、復興への思いを込めて「鳴子ソーラン」と「和太鼓」の演技・演奏を披露しました。会場全体に連帯感が広がっていくのを感じ、感動を抑えきれず、生徒も教師も決して無駄ではなかったと嬉し泣きました。

「20歳になったら、同級会を福島でやりましょう。美味しいものを食べて『福島っていいところですね』って言いますから。先生、待っていてください！」彼らからももらったありがたい言葉、卒業してから10年以上経ちましたが、本当に実現するなんて夢のようでした。今では立派な社会人、素敵な26歳になっていて、私の自慢の教え子たちです。会津を食べ歩きし、観光地巡りしたことは良い思い出となりました。



【新会員として】

わたしたちの学校 お気に入り

二本松市立岳下小学校

車田 敦子

「わたしたちの学校 お気に入りの1枚」。今、体育館の壁には、子どもたち一人一人が学校で一番好きなところを撮った写真が、飾られています。これは、創立150周年にあたり、実行委員会の子どもたちが、記念に考えた企画の一つです。教室、校庭、図書室、音楽室、ブランコ、花壇、池の鯉、給食、学級目標、木・・・。「先生や友達と過ごした楽しい場所だから」「ほっとするから」「鼓笛の練習をがんばった場所だから」「みんなで考えたから」・・・とそれぞれの思いが詰まった写真に囲まれながら、創立150周年の記念式典を行うことができました。

また、午後に行った実行委員会企画の岳下っ子まつりでは、縦割り班で校内をめぐりながら、学校の宝物に触れたり、学校についてのクイズをしたり、学校の写真を使ってしおりを作ったりしました。自分たちで考え準備し、任された喜びを感じながら運営している実行委員の子どもたちや、友達と関わり合いながら目を輝かせ活動する子どもたちの姿が、とても生き生きと感じられ、幸せを感じました。

子どもたちにとって、学校がどれだけ特別な存在で、こんなにも好きなのだなど改めて感じました。そして、学校生活の中で、子どもたちの心の中に、この「大好き」がどんどん増えていってほしいと強く思いました。子どもたちの小さな成長を生むため、子どもたちの姿から始まる日々の教育活動を充実させていきたいと思います。

教頭としてのスタートをきり、育てていただいた安達地区で、再び勤務できることにご縁を感じています。安達支会の皆様方には、日頃よりあたたかく励ましていただき、感謝しております。今後ともご指導くださいますよう、よろしく願いいたします。

【新会員として】

地 元

二本松市立原瀬小学校 佐藤 睦弘

原稿の依頼を受け、改めて安達地区での勤務年数を調べてみると、勤務年数35年間で24年間、実に68%もの期間、安達地区で勤務していることを再確認しました。多くの心優しい先輩方、頼もしい同僚達に恵まれ、今現在も心地よく勤務しています。ただただ感謝しかありません。

9月の下旬、学校に若連の方が3名来校し、原瀬小の児童が2名、太鼓台のメンバーになっている旨を報告に来てくれました。校長室に案内した後、若連の方が準備してくれたプリントに目をやると、一番下の担当者名に、教え子と同名同名の名前があるではない



ですか。「この□□□□君って、教え子と同じ名前です・・」と、そこまで言いかけたとき、まんな中に座っていた若連の方がマスクを外し「睦弘先生、お久しぶりです!」と、笑顔であいさつをしてくれました。□□□□君でした。彼は岳下小学校の卒業生で、現在連若でも活躍しているとのこと。

このような再会はこれだけではなく、出入りの業者さんであったり、事業所のスタッフさんだったり、もちろん校長先生方であったりと、長年勤務した地元に戻ってきたことを実感させられます。

自分がまだ若く教諭だった頃、今では考えられない無謀な授業やそれに伴う無理なお願いを、広い心で許してくれた当時の校長先生、教頭先生方。管理職とはどうあるべきかを本気



になって指導してくれた校長先生方。今勤務している原瀬小学校で、いただいてきた無数の恩を少しでも返していかななくてはならないと思っています。皆様、これからもよろしく願いいたします。

【新任校長として】

創立20周年をむかえて

二本松市立旭小学校 堀江 茂樹

旭小学校は、阿武隈山系では大滝根山に次ぐ高峰「日山」の裾野に広がる旭地区にあります。

子どもたちは、旭地区の各所に出向いて、様々な活動を体験しています。全校児童で行う田植え体験では、泥だらけになりながらも学年を超えて協力して活動しました。5・6年生は、百目木在住の歴史研究家を講師にお迎えして、旭地区の歴史・文化めぐりを行いました。全校生による日山活動では、学校菜園で収穫した野菜を茹で、じゃがバターや焼きとうもろこしなどにアレンジしながら食べました。こうした活動を通して、子どもたちはふるさとへの想いを深めています。

さて、本校は、旧岩代町立百目木小学校と旧岩代町立田沢小学校を統合し、平成16年4月1日に旧岩代町立旭中学校の校舎を改修して開校し、今年度、創立20周年をむかえました。



今から20年前、百目木にお住まいの杉山ミチさんが作詞された旭小学校の校歌には、「日山を仰ぐ校庭に」「祖先がひらいたこの大地」「流れも清い くちぶとは」と、ふるさとへの愛情が込められているのと同時に、「みんなで学ぶ みんなでつくる みんなの誇り 旭小学校」と歌われています。この言葉が意味するように「みんなで力をあわせ」「困難を乗り越え」「旭小の子どもとして誇りを持ち」、日々「学び続ける」子どもが、旭小学校のめざす子ども像です。

本校の教育目標「夢と誇りをもち 自ら輝く子どもの育成」の具現化を目指し、旭小学校の歴史と伝統を守りながら、これからも教職員一同、誠心誠意、努めてまいりたいと思います。

最後になりましたが、校長会の皆様には日ごろよりご助言をいただき大変感謝申し上げます。今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。

【新任校長として】

すごい大人とは

二本松市立東和小学校

肥沼 志帆

私は教員として採用されるまで長く時間がかかりました。その時からこれまで、たくさんの先輩方に教え導いていただき、今の自分があります。そのため、教えていただいたことを少しでもこれからの先生方に伝えていきたいと思うようになりました。新任校長として、自分が先輩方から教わったことを伝えられているか、自問自答の日々です。ただ一つ、続けているのは、どんなことも目の前の子どもの姿から考えることです。

様々な課題はありますが、本校の子どもたちは、下の学年への思いやりの気持ちがとても強いです。登校時や縦割り活動など優しい気持ちで接しています。自校の強みを見極め、教職員全員で強みを武器に取り組んでいく大切さを感じています。

また、学習発表会（6年生）では、こんな言葉が出てきました。自分の将来を思い描く場面で「すごい大人になろうよ」

「すごい大人ってどんな大人？」

「分からないよ。でも考えていこうよ」

自分に突きつけられているような思いがしました。このような、答えのない問いを、教師も家庭も地域も子どもと共に考えていくことが大切なのだ子どもから教えられました。これからも、子どもの成長を支えている本校の教職員と力を合わせて本校ならではの教育活動をつくっていききたいと思えます。

最後になりましたが、「何か困っていることはない？」「いつでも相談してね」など、温かなお言葉をかけていただいている先輩の校長先生方に心から感謝申し上げます。今後ともどうぞよろしく願いいたします。



【新任校長として】

創立150周年の年に

本宮市立糠沢小学校

芳賀沼真由美

4月、私は創立150周年を迎える糠沢小学校へ着任した。

150周年記念の年に一体何ができるだろうか。子どもたちが参加し、思い出に残ることは…。

教職員やPTA役員とも相談し、航空写真撮影、マスコットキャラクターの選定、全校制作、学習発表会での全校合唱に取り組むことなどを決めた。

100点を超えるマスコットキャラクター応募作品の中から児童・保護者・教職員で1点を選び、旗作成、全校制作を進めた。そして、学習発表会での全校制作の披露と全校合唱の発表。全校児童113名の力を結集して完成した全校制作、心をひとつに歌った全校合唱「ふるさと」。糠沢っ子たちのパワーやふるさと糠沢を思う温かい気持ち触れ、自然と涙が溢れた。



これまで家族や地域の方に見守られながら大切に育てられてきた糠沢っ子たちと創立150年の節目を一緒に迎えることができた。糠沢っ子たちと教職員、みんなで力を合わせ、新たな糠沢小学校の歴史を刻む一步を踏み出すことができることを嬉しく思う。